



저작자표시-비영리-변경금지 2.0 대한민국

이용자는 아래의 조건을 따르는 경우에 한하여 자유롭게

- 이 저작물을 복제, 배포, 전송, 전시, 공연 및 방송할 수 있습니다.

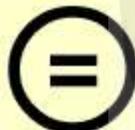
다음과 같은 조건을 따라야 합니다:



저작자표시. 귀하는 원저작자를 표시하여야 합니다.



비영리. 귀하는 이 저작물을 영리 목적으로 이용할 수 없습니다.



변경금지. 귀하는 이 저작물을 개작, 변형 또는 가공할 수 없습니다.

- 귀하는, 이 저작물의 재이용이나 배포의 경우, 이 저작물에 적용된 이용허락조건을 명확하게 나타내어야 합니다.
- 저작권자로부터 별도의 허가를 받으면 이러한 조건들은 적용되지 않습니다.

저작권법에 따른 이용자의 권리는 위의 내용에 의하여 영향을 받지 않습니다.

이것은 [이용허락규약\(Legal Code\)](#)을 이해하기 쉽게 요약한 것입니다.

[Disclaimer](#)

硯士學位論文

取り立て助詞
「ばかり」「だけ」の研究



濟州大學校 大學院

日語日文學科

森本 泰世

2006年 12月

硯士學位論文

取り立て助詞
「ばかり」「だけ」の研究



指導教授 金 勝 漢

濟州大學校 大學院

日語日文學科

森本 泰世

2006年 12月

取り立て助詞
「ばかり」「だけ」の研究

指導教授 金 勝 漢

森本 泰世

이 論文을 文學 碩士學位 論文으로 提出함

2006年 12月

森本泰世의 文學 碩士學位 論文을 認准함

審査委員長	_____	印
委 員	_____	印
委 員	_____	印

濟州大學校 大學院 日語日文學科

2006年 12月

Research on the Toritate Particles
「ばかり」 and 「だけ」

Yasuyo Morimoto

(Supervised by Professor Seung-han Kim)

A thesis submitted in partial fulfillment of the
requirement for the degree of Master of Arts

Department of Japanese Language and Literature

GRADUATE SCHOOL
CHEJU NATIONAL UNIVERSITY

2006. 12.

<한국어초록>

取り立て助詞「ばかり」「だけ」の研究

森本 泰世

濟州大學校 大學院 日語日文學科

指導教授 金勝漢

일본어를 배움에 있어 문법은 중요하다. 그 중에서도 조사를 올바르게 사용하는 것은 어려우며 습득하기 또한 힘들다. 일본에 장기간 유학한 일본어 학습자도 적절히 조사를 사용할 수 없는 경우가 있다.

특히, 「ばかり」와 「だけ」는 매우 비슷한 의미를 가지고 있는 조사이며 사용함에 있어 혼동하기 쉬운 조사이다.

이 논문의 목적은 取り立て助詞인 「ばかり」와 「だけ」를 구분하는 것으로 서로의 기능과 용법에 따라 두 조사를 비교하여 적절한 사용과 특성의 차이를 알아내고자 하였다.

신문, 소설, 인터넷 등을 통하여 「ばかり」와 「だけ」가 포함된 문장을 수집하고 그것을 토대로 용법, 의미 등에 따라 분류했다.

「ばかり」와 「だけ」는 주로 한정을 표현하는 取り立て助詞다. 이 두 조사는 의미는 비슷하나 같지는 않다. 「ばかり」와 「だけ」를 연구하고, 이 두 조사를 비교하여 얻은 내용은 다음과 같다.

- 1) 격조사(格助詞)와 「ばかり」, 「だけ」의 관계에 대해서 볼 때, 「ばかり」는 「명사(名詞)+격조사(格助詞)+取り立て助詞」의 경우 격조사(格助詞) 「が」 「より」 「まで」 이외의 격조사(格助詞)에 접속하며, 「명사(名詞)+取り立て助詞+격

조사(格助詞)」와 같은 경우 모든 격조사(格助詞)에 접속하여 사용할 수 있다. 그러나, 「だけ」는 「명사(名詞)+격조사(格助詞)+取り立て助詞」 같은 경우, 격조사(格助詞) 「が」 「を」 「より」 이외의 격조사(格助詞)에 접속하고, 「명사(名詞)+取り立て助詞+격조사(格助詞)」 같은 경우, 모든 경우에 사용할 수 있다.

2) 「ばかり」와 「だけ」는 여러 가지 의미가 있지만, 한정(限定)의 의미에서 「ばかり」와 「だけ」는 유사하다. 게다가, 「ばかり」는 「사항(事柄)·사물(事物)의 한정」, 「시간(時間)의 한정」, 「구별(區別)의 한정」을 나타내며 상세한 분류가 가능하지만, 「だけ」는 단순한 한정(限定)의 의미만 갖고 있다.

3) 「ばかり」와 「だけ」는 정도의 의미도 갖고 있다. 정도의 의미에 대해서는 유사하다.

4) 한정(限定)의 의미로서 「ばかり」와 「だけ」를 바꿀 수 있는 경우는, 어떤 것과 다른 것을 구별하는 의미를 갖고 있는 경우와 「ばかりでなく」, 「ばかりではない」라는 부정적인 의미를 갖는 경우이다.

5) 「ばかり」와 「だけ」는 바꿀 수 있지만, 바꿀 경우 의미가 다르게 되는 경우가 있다.

6) 「ばかり」만 사용할 수 있는 경우는 한정(限定)되는 것을 자주 한다는 의미를 포함하는 경우이다.

7) 「だけ」만 사용할 수 있는 경우는 「だけに」, 「だけあって」라는 관용적 표현이며, 이는 신분, 사정, 능력에 따르며 수와 양의 의미를 포함하는 경우라고 할 수 있다.

〈日本語抄録〉

取り立て助詞「ばかり」「だけ」の研究

森本 泰世

済州大学校 大学院 日語日文学科

指導教授 金勝漢

日本語を学習する上で、文法というものは重要である。その中でも、助詞の使い分けは難しく、習得が難しいようである。そして、日本に何年か留学したことのある学習者でも、まだ使い分けがはっきりできないということが現状であるようである。

特にその中でも、「ばかり」と「だけ」は意味的には非常によく似ている助詞であり、使い分けがまぎらわしい助詞である。

そこで、本論文では、取り立て助詞と呼ばれる「ばかり」と「だけ」のそれぞれの機能や用法を明らかにし、そして両者の比較を行い、使い方や性質の違いを探ることを目的としたものである。

研究方法としては、新聞、小説、インターネットなどから、「ばかり」と「だけ」を含む文を集め、それをもとにそれぞれの接続や意味などに分類した。

「ばかり」と「だけ」は主に限定を表す取り立て助詞である。この二語は意味もよく似ているが、全く同じかと言えばそうではない。「ばかり」と「だけ」を研究し、両者を比較した結果、得られたものは次のとおりである。

1) 格助詞と「ばかり」「だけ」の位置関係においては、「ばかり」は、「名詞＋格助詞＋取り立て助詞」の場合、格助詞「が」「より」「まで」以外に接続し、「名詞＋取り立

て助詞＋格助詞」の場合は、すべての場合に使うことができる。一方、「だけ」は、「名詞＋格助詞＋取り立て助詞」の場合、格助詞「が」「を」「より」以外に接続し、「名詞＋取り立て助詞＋格助詞」の場合は、すべての場合に使うことができる。

2) 「ばかり」と「だけ」はいろいろな意味を持つが、「限定」の意味においては、「ばかり」と「だけ」は共通する。「ばかり」は「限定」という意味の中でも、さらに、「事柄・事物の限定」、「時間の限定」、「区別の限定」と細かく分けられるのに対し、「だけ」は単なる「限定」の意味のみ持っている。

3) 「ばかり」と「だけ」は程度の意味も持っている。程度の意味においては、どちらも共通し、同じように使うことができる。

4) 「ばかり」と「だけ」を入れ替えできる場合は、「限定」の意味の中でも「あるものを他と区別する」という意味を持つ場合、「ばかりでなく」や「ばかりではない」というような否定の意味を伴う場合である。

5) 「ばかり」と「だけ」は入れ替えが可能だが、入れ替えるとニュアンスが変わってしまう場合がある。

6) 「ばかり」のみ使用できる場合は、「限定されたことをしきりにする」という意味を含む場合である。

7) 「だけ」のみ使用できる場合は、慣用句的な「だけに」や「だけあって」という表現で、「身分や事情や能力に応じての」や、「数量にあてはまる程度」というような意味を含む場合であると言うことができる。

目 次

1. 序論	1
1.1. はじめに	1
1.2. 取り立て助詞とは	2
1.3. 先行研究による取り立て助詞	3
1.4. 「ばかり」「だけ」の先行研究	4
2. 取り立て助詞「ばかり」	5
2.1. 「ばかり」の接続	5
2.2. 「ばかり」と格助詞の位置関係	7
2.3. 「ばかり」の意味	8
2.4. 「ばかり」の慣用句的な用法	15
3. 取り立て助詞「だけ」	17
3.1. 「だけ」の接続	17
3.2. 「だけ」と格助詞の位置関係	19
3.3. 「だけ」の意味	21
3.4. 「だけ」の慣用句的な用法	25
4. 限定の取り立て助詞「ばかり」と「だけ」の比較	26
4.1. 「ばかり」と「だけ」両方使用できる場合	26
4.2. 「ばかり」と「だけ」を入れ替えるとニュアンスが異なる場合	29
4.3. 「ばかり」のみ使用できる場合	30
4.4. 「だけ」のみ使用できる場合	32
5. 結論	35
参考文献	37
Abstract	39

1. 序 論

1.1. はじめに

外国語を学習する上で、助詞の使い分けというのは非常に重要である。助詞の使い分けによって、文脈が大きく変わってくる場合もある。しかし、日本語学習者にとって習得が最も難しく、日本に何年か留学したことのある学習者でも、まだ使い分けがはっきりできないという場合があるということが現状であるようである。

特にその中でも「ばかり」と「だけ」は非常にまぎらわしく、使いにくい助詞であるようである。「ばかり」を使うところに「だけ」を使ったり、「だけ」を使うところに「ばかり」を使ってみたりする。それだけ日本語学習者にとって、「ばかり」と「だけ」は使い分けが難しい助詞なのであろう。

また、日本語学習者からこの両者の違いは何なのかははっきりわからないということもよく耳にする。そこで私は「ばかり」と「だけ」の使い方の誤りや難点などを感じた。

「ばかり」と「だけ」は現代語であり、よく使われる助詞だが、この二語の用法はとてもよく似ている。「ばかり」と「だけ」が含まれる文の「ばかり」と「だけ」の部分を入れ替えてもほとんど意味が変わらない場合がある。または入れ替えると意味が変わってしまう、あるいはその文章自体がおかしくなるというような場合もある。それでは、そのようなものは一体どのような場合であるのだろうか。

「ばかり」と「だけ」は、両者とも取り立て助詞である。限定という意味では同じで入れ替え可能な場合が多いが、だからといってこの二語が常に全く同じ意味を表すかというそうではない。

本論文では、取り立て助詞としての「ばかり」と「だけ」、それぞれの接続法、機能や用法を研究し、そして両者の比較を行い、使い方の違いや性質の違いを研究することとする。

研究方法としては、新聞や小説などから、「ばかり」と「だけ」を含む例文を抜き出し、それをもとに研究を進めていくこととする。

1.2. 取り立て助詞とは

- (1) 今日は先生も私の店に遊びに来てくれた。
(2) 今日は先生しか私の店に遊びに来てくれなかった。

(1) (2) より、「私」が何かの店を経営していると仮定する。(1) では友だちも先生も店に遊びに来たことになり、(2) では先生以外には誰も店に来なかったということになる。

(1) (2) には共通している部分と異なっている部分がある。まず、共通している部分は、どちらも「先生が店に遊びに来てくれた (こと)」である。つまり、(1) や (2) の文を言うとき、話し手は「先生が店に遊びに来てくれた (こと)」の事実を知っていることになる。このように、文中で話し手がその事実を知っているということをその文の「前提」という。

次に異なっている部分は、事実である「先生が店に遊びに来てくれた (こと)」に対する話し手の感情である。(1) は、「先生」と「先生以外の人」が店に遊びに来たことを暗示し、(2) は、「先生」だけ店に遊びに来ていて、「先生以外の人」は来なかったことを暗示している。これらのように、暗示していることを「含意」と呼んでいる。

(1) (2) の例文では、

- (1a) (2a) 先生が店に遊びに来てくれた (こと) <前提>
(1b) 先生以外の人も店に遊びに来てくれた <含意>
(2b) 先生以外は店に遊びに来てくれなかった <含意>

(1a) (2a) が「前提」であり、これに対して、(1b) (2b) が「含意」である。

このように文中の要素に付いて、その要素やその要素が表わす事などに対する話し手のとらえ方を暗示することを「取り立てる」と言い、それを表わす助詞を「取り立て助詞」と呼んでいる。

取り立て助詞の種類には、次のようなものがある¹⁾。

も、だけ、しか、ばかり、は、くらい、こそ、さえ、すら、だって、でも、など、なら、のみ、まで

1.3. 先行研究による取り立て助詞

「副助詞」「係助詞」という用語は山田孝雄によって始まり、山田の研究によると、副助詞は、「ばかり」、「まで」、「など」のように、或る用言の意義に關係を有する語に付屬して遙かに下なる用言の意義を修飾するものであるとされ、係助詞は、「は」、「も」、「こそ」のように陳述をなす用言に關係ある語に付屬して、その陳述に勢力を及ぼすものであるとしている。そして、「副助詞」と「係助詞」の違いを陳述に勢力を及ぼすかどうかによると述べている²⁾。

「取り立て助詞」「とりたて詞」という語は宮田幸一により始まった³⁾。これにより、従来の「副助詞」「係助詞」というものがひとつにされたのである。そして、研究の重点が、「副助詞」と「係助詞」の文法的な性質の違いよりも、これらの助詞ひとつひとつの意味・機能を明らかにすることになってきたのである。取り立て助詞においてはさまざまな研究がされており、その数も多くある。しかし、研究者によって取り立て助詞の分類には若干の相違が見られる。

まず、沼田善子の研究⁴⁾によると、取り立て詞の定義とは、文中のさまざまな要素—これを「自者」と呼ぶことにする—を取り立て、これに対する他の要素—これを「他者」と呼ぶことにする—との論理的關係を示す語としている。

また、寺村秀夫の研究では、『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』において、取り立て助詞を、「は、も、こそ、さえ、まで、でも、だって、しか、だけ、ばかり、など」に分類し、各論について述べている。

1)沼田善子(2003),「現代語のとりたての体系」,沼田善子・野田尚史編『日本語のとりたて—現代語と歴史的变化・地理的変異』,くろしお出版,p225

2)山田孝雄(1979),「助詞の種類別け」,服部四郎・大野晋・阪倉篤義・松村明『日本の言語学第4巻』,大修館書店,pp458~459

3)沼田善子(1986),「とりたて詞」,奥津敬一郎・沼田善子・杉本武『いわゆる日本語助詞の研究』,凡人社

4)沼田善子(1989),「とりたて詞とムード」,仁田義雄・益岡隆志『日本語のモダリティ』,くろしお出版, p159

1.4. 「ばかり」「だけ」の先行研究

「ばかり」「だけ」の先行研究の代表的な研究者には、森田良行、野田尚史、沼田善子などがある。

森田良行の研究⁵⁾によると、「ばかり」と「だけ」を意味論的な視点から文法における特徴や類義語としての意味比較を行ない、「ばかり」と「だけ」の意味を接続によって分類し、「ばかり」と「だけ」の限定の意味を細分化している。

野田尚史の研究⁶⁾によると、文法的な性質の面からの主題と取り立ての体系化として、取り立て助詞を、意味や機能によってグループ別けするのではなく、それぞれの取り立て助詞が持っている文法的な性質の違いによってグループ別けして、「ばかり」と「だけ」を区別している。

沼田善子の研究⁷⁾によると、「ばかり」と「だけ」を視点から考察し、それぞれ、「個別の視点」と「包括的視点」とに区別している。

5) 森田良行(1994),『動詞の意味論的文法研究』,明治書院,pp340

6) 野田尚史(1995),『文の階層構造からみた主題ととりたて』,くろしお出版,pp15~16

7) 金水敏・工藤真由美・沼田善子(2000),『時・否定と取り立て』,岩波書店,p190~191

2. 取り立て助詞「ばかり」

2.1. 「ばかり」の接続

「ばかり」は他の取り立て助詞と同様に、さまざまな語に接続することができる。

2.1.1. 名詞・代名詞との接続

(3) 私のまわりは最近そういう話しばかりだった。(よしもと ばなな『海のふた』)

(4) 私の父は毎日そればかり言っている。

(3) は、「話し」という名詞に「ばかり」が接続しており、(4) は代名詞「それ」に「ばかり」が接続している。このように「ばかり」は名詞・代名詞に接続することができる。

2.1.2. 副詞との接続

副詞には、「様態の副詞」「程度の副詞」「陳述の副詞」「量の副詞」「テンス・アスペクトの副詞」などがある⁸⁾。

(5) ちょっとばかり興味がある。

8) 益岡隆志・田窪行則 (1992), 『基礎日本語文法』, くろしお出版, p40

(6) わずかばかりですが、受け取ってください。

(5) (6) は、数量を表わす副詞に「ばかり」が接続している。様態、程度、陳述、テンス・アスペクトの副詞に「ばかり」が接続している例は見あたらなかった。つまり、数量を表わす副詞につくことはあるが、それ以外の副詞にはつかないと言うことができる。

2.1.3. 動詞との接続

(7) その日は音楽を聞くばかりだった。

(8) 店にいたほうの人は知り合ったばかりで、ちょっといいなと思っているだけ。

(よしもと ばなな『海のふた』)

(9) ただぼんやりと考えているばかりだ。

(7) は「聞く」という動詞の「ル」形に「ばかり」が接続し、(8) は「知り合った」という動詞の「タ」形に「ばかり」が接続し、(9) は「考えている」という動詞の「テイル」形に「ばかり」が接続している。文脈からみても、どの場合も使えるのでそれぞれに接続するということがわかる。

2.1.4. 形容詞との接続

(10) しかし車屋だけに強いばかりでちっとも教育がないからあまり誰も交際しない。

(夏目 漱石『吾輩は猫である』)

(11) 三人のむすめたち、だれも、きれいに生まれついてきているなかで、いちばん

末の女の子は、きれいというだけではたりない、それ・・・顔かたちの美しいばかりでなく、心のすなおで善いこのむすめとはうらはらで・・・

(楠山 正雄 訳『ラ・ベルとラ・ベート』)

(12) 新しくできた中華レストランは、駅から近いばかりでなく、味もピカ一だ。

(10) ~ (12) は「強い」、「美しい」、「近い」という形容詞に、それぞれ「ばかり」が接続している。よって、「ばかり」は形容詞に接続することができる。

2.2. 「ばかり」と格助詞の位置関係

取り立て助詞「ばかり」は次のように、格助詞の後にも現れ、名詞と格助詞の間にも現れる。2.2.では、「ばかり」と格助詞の位置関係について調べることにする。

2.2.1. 名詞＋格助詞＋取り立て助詞

- (13) * 今日がばかり憂鬱だ。
- (14) ? あなたをばかり嫌いだ。
- (15) 死ぬことをばかり考えてて、
- (16) 彼にばかり頼る。
- (17) あなたからばかり話しているように思う。
- (18) 今日は彼からの電話を待ち、電話とばかり向き合っている。
- (19) 図書館でばかり勉強しています。
- (20) タイへばかり旅行する。
- (21) * ちょっと家までばかり送っていく。
- (22) * デザートは、みかんよりばかりりんごもある方がいい。

(13) ~ (22)を見ると、格助詞の後に「ばかり」がつく場合、格助詞「が、まで、より」にはつかず、それ以外の格助詞につくようである。とくに、格助詞「に、で」につく場合が多く、格助詞「を」の後にはつかず、(14)の場合は少し不自然になるようである。格助詞「を」の後につく場合は、不自然になる場合が多いようである。

この形では、「ばかり」の取り立て詞としての用法が多く現れると言える。

2.2.2. 名詞 + 取り立て助詞 + 格助詞

- (13a) 今日ばかりが憂鬱だ。
- (14a) あなたばかりを嫌いだ。
- (15a) 死ぬことばかりを考えてて、
- (16a) 彼ばかりに頼る。
- (17a) あなたばかりから話しているように思う。
- (18a) 今日は彼からの電話を待ち、電話ばかりと向き合っている。
- (19a) 図書館ばかりで勉強しています。
- (20a) タイばかりへ旅行する。
- (21a) ちょっと家ばかりまで送っていく。
- (22a) デザートは、みかんばかりよりりんごもある方がいい。

(13a) ~ (22a) を見てみると、ほとんどの場合が使用できると言えるだろう。このように、名詞に続いて、格助詞の後にくる「ばかり」よりも、名詞と格助詞の間にくる「ばかり」のほうが多く使われるということができるようである。

2.3. 「ばかり」の意味

「ばかり」は「はかり」という語から来た語である。動詞「はかる」つまり「おしはかる」という意である。「ばかり」は、数量や範囲の幅を話し手が推しはかり、または予測する気持を表わし、そしてその範囲をそれと限定する取り立て助詞である⁹⁾。

「ばかり」は、会話上では「ばっかり」または、「ばっかし」と発音されることが多いが、この場合、何かが多いことに不満を込めて、強調するときに言うことが多い¹⁰⁾。

(23) 毎日暑いので、冷たい物ばかり飲んでしまいます。

(24) 飼っていた猫が死んでしまって、弟は毎日泣いてばかりいます。

(23) は冷たい物を飲む量が多いことを、(24) は弟が泣いていることが多いという話し手の気持をそれぞれ含意している。そして、(23) では、飲む物が冷たい物だという範囲を限定し、(24) では、弟の動作が泣いているということの限定を表わしている。

(25) 彼女ばかりもてる。

(25) の「ばかり」が取り立てる自者は「彼女」である。そして、次の(25a)を「前提」とし、(25b)を「含意」としている。

(25a) 彼女がもてる。

(25b) 彼女以外 (例えば、私や彼女の友だちなど) がもてない。

(25) のように、前提である(25a)では、自者である「彼女」が「もてる」ということを肯定しているが、その反面、含意である(25b)では、他者である「彼女以外」が「もてない」と否定されているのである。

このように、「ばかり」は、前提で自者が肯定ということになり、含意で他者が否定ということになるということができる。

数量を表す意味については、例えば、「生徒30人ばかりを集める」は、「たぶん30

9) 森田良行(1980), 『基礎日本語2』, 角川書店, p400

10) 寺村秀夫 (1991), 『日本語のシタクスと意味Ⅲ』, くろしお出版, p173

人程度は集まるだろう」と、数量や範囲の幅を話し手が予測する気持を表わしている。これは、後で詳しく見ることにする。

「ばかり」はいろいろな語に接続して、範囲をそれに限る、つまり限定を表わす助詞である。

「ばかり」は基本的には「限定」の意味を持つが、その「限定」の中でも何を限定しているかというように細かく分けることができそうである。また「ばかり」の接続する語の性質により、その「限定」という意味から他の意味に分かれていくことがある。

(26) テーブルには簡単な食事ばかり用意されていた。

(27) 彼女はつらくてだんだんやせ細ってくるばかりなのに、僕は彼女に何もしてあげることができなかった。

(26) は、「用意されていた」と関係するものとして、「簡単な食事」をあげ、それと同時に、「簡単な食事」以外のもの（例えば、もう少し豪華な食事）が出される期待とは逆に「用意されていた」ということを表わしている。

これは、「AばかりB」の形で、Bと関係するものとしてAをあげている。それと同時に、A以外の期待・予想されるものすべてがBでないことを表わすという意味である。

(26) は、名詞＋「ばかり」の用法を見たが、述語＋「ばかり」でも同じ用法である。

(27) は、「僕」が「何もしてあげられなかった」と関係するものとして「彼女はつらくてだんだんやせ細ってくる」ことをあげ、それと同時に、それ以外の期待（例えば、彼女がやせ細らないこと）とは逆に「何もしてあげられなかった」ということを表わしている。

2.3.1. 限定の「ばかり」

2.3.1.1. 動作の限定

ここでは、単なる「限定」の意味としての「ばかり」をみていくこととする。

(28) 私は彼らを憎むばかりじゃない、彼らが代表している人間というものを、一般に憎むことを覚えたのだ。(夏目 漱石『ころ』)

(29) ラングドンは目を見張るばかりだった。(ダン・ブラン『ダ・ビンチ・コード』)

(30) しかし私の目はさえてくるばかりです。(夏目 漱石『ころ』)

(31) あの子は勉強しているばかり。

(32) おばあちゃんが死んだときはずっと部屋で泣いてばかりいたけれど、(よしもと ばなな『海のふた』)

(28) は、「憎む」について、「憎む」ということの動作に、(29) は、「見張る」について、「見張る」ということの動作に、(30) は、「さえてくる」について、「さえてくる」ということの動作にそれぞれ限定している。(28)～(30) はどれも動詞の「ル」形についている。

(31) は、「勉強している」ということの動作を限定し、(32) は「泣いている」ということの動作を限定している。つまり、(28)～(32) は、「ばかり」の前にくる動作について、その動作を限定しているのである。

2.3.1.2. 事柄・事物の限定

(33) だっておばあちゃん、毎日植木の世話ばかりしてたもん。(よしもと ばなな『海のふた』)

(34) 私が書物ばかり買うのを見て、奥さんは少し着物をこしらえろと言いました。(夏目 漱石『ころ』)

(35) スペインとフランスにはさまれた不毛の小国。石の監房で震え、ただ死ばかりを願っていたとき、信じられないことにシラスは救われた。(ダン・ブラン『ダ・ビンチ・コード』)

(36) いいところばかりだったわけでもないし、いい人ばかりでもないし。
(よしもと ばなな『海のふた』)

(37) 私のまわりは最近そういう話ばかりだった。
(よしもと ばなな『海のふた』)

(38) ヨーロッパ人ばかりいるところで、こういう話をしたら、アメリカ人と全く同じ反応をした。
(金田一 春彦『ホンモノの日本語を話していますか?』)

(33) は、「植木の世話」という限定されたことを何度もしきりに行っていることを表わしている。(34) は、私が、「書物を買う」という限定されたことをしきりに行っていることを表わす。(35) は、「死を願う」という限定されたことを何度も行っていることを表わしている。

(33) ~ (35) により、ある行為や作用・事物のみが数多く存在する意味を持っていることがわかる。また、その行為の対象を限定すれば、「限定された事柄を何度もしきりに行う」ことになる。

(36) は、「いいところ」と「いい人」のみが数多く存在することを否定している。(37) は、「そういう」が指す「話」のみが数多く存在することを表わしている。(38) は、「ヨーロッパ人」のみが数多く存在することを表わしている。(36) ~ (38) では、さきほどの(33) ~ (35) と同じく、ある行為や作用・事物のみが数多く存在する意味を持っているが、その事物を限定しているので、「それのみが数多く存在する」という意味になる。

2.3.1.3. 時間の限定

(39) ようやく補助輪がとれたばかりで、その走りは頼りなく、危なっかしい。
(市川 拓司『いま、会いにゆきます』)

(40) はじめちゃんをこよなく愛したおばあちゃんのいない世界に、はじめちゃんは漕ぎ出したばかりだった。(よしもと ばなな『海のふた』)

(41) (野球の) 08年の北京五輪開催が決まった後、ラフィバー監督を招いて本格強化に乗り出したばかり。毎日新聞(06.03.07)

(39)は、(自転車の)「補助輪がとれた」ということの時間を限定している。(40)は、「漕ぎ出した」ということの時間を限定し、(41)は、「乗り出した」ということの時間を限定している。

(39)～(41)を見てみると、「～タ」に「ばかり」がついて、「～して間もない」、「今始めたところで、それが今も継続している」という状態を表わすことができる。そして、話し手が話す時点と、その動作の時点との時間的差がほんのわずかであるということができる。「ばかり」は限定という意味を表すが、限定の中でもその時間を限定することができる。

2.3.1.4. 区別の限定

(42) いきおい偽メールや偽造計算書など、昨今の偽造・偽装の荒っぽさが思い浮かぶが、こればかりは精巧な方がいいと言っているわけではない。

毎日新聞(2006.3.7)

(43) 「ニューヨークタイムズ」というのはアメリカの有名な新聞だが、最後の面を見ると1ページから続く、2ページから続く、とそんな記事ばかりである。

(金田一 春彦『ホンモノの日本語を話していますか?』)

(44) これに対し、西日本では、京都の鹿ヶ谷とか清水谷とか一ノ谷のように、タニと読むものばかりである。(金田一 春彦『ホンモノの日本語を話していますか?』)

(42) では、「これ」という代名詞が指す「偽造・偽装の荒っぽさ」をそれ以外のものと区別することによって、「偽造・偽装の荒っぽさ」ということの区別の限定を表わしている。(43) では、「そんな記事」が指すことを、他の記事と区別することによって、「そんな記事」の区別を限定している。(44) では、「タニと読むもの」を他のタニと読まないものと区別し、その区別を限定していることがわかる。(42) ~ (44) の場合、意味としては「限定」なのだが、その中でも何かを他のものと「区別するための限定」であるということがわかる。よって、「ばかり」の限定という意味の中に区別を表す限定があると言える。

2.3.2. 程度の「ばかり」

(45) 授業が始まって、一ヶ月ばかりすると私の心に、また一種の弛みが出てきた。(夏目 漱石『ころ』)

(46) 「このミカンを千円ばかりください」と言う。千円ばかりというのは、およそ千円という意味だ。しかし千円買うのである。それでも千円ばかり、とぼかす。(金田一 春彦『ホンモノの日本語を話していますか?』)

(47) 奥さんはきれいな眉を寄せて、私の半分ばかりついであげた杯を、唇の先へ持っていった。(夏目 漱石『ころ』)

(45) は、「一ヶ月」という期間を表わす語について、そのコトのほどあいやおよその程度を表わしている。(46) は、ミカンをおよそ千円ほどくださいということであり、ミカンを買う数量のおよその程度を表わしている。(47) は、「半分」という数量を表わす語につき、私の「半分」というおよその程度を表わしている。このように、数量を表わす語について、ほどあいやおよその程度を表わすことができる。

(48) お金はわず**かばかり**ではあるが、これで彼女を助けてあげたかった。

(49) 「そうかね」ファーシュは少しばかりもどかしそうに言った。

(ダン・ブラン『ダ・ビンチ・コード』)

(50) 私は、ちょっとばかり試してみたかったのだ。

(48) は、「お金」が「わずか」だということの程度を表している。(49) は、「ファーシュ」が「もどかしそうに言った」ということの程度を表している。(50) は、「私」が、「試してみたかった」ことの程度を表している。いずれも漠然と程度を表す言い方である。

(48) ~ (50) は、マイナス的な評価を表している「わずか、少し、ちょっと」などの副詞に「ばかり」がつくと、程度を表している。

2.4. 「ばかり」の慣用句的な用法

2.4.1. 「～んばかり」

(51) 老いた男の裸体など見たくもないと言わんばかりに、うなり声を漏らした。

(ダン・ブラン『ダ・ビンチ・コード』)

(52) 「ばかげてる！なんの証拠もないじゃないか！」

そうだろうか、と言わんばかりにソフィーは目を見開いた。

(ダン・ブラン『ダ・ビンチ・コード』)

(53) 「～というような」や「といた」、「(さも) ~と言わんばかりの」といった表現を使うようにしたいものです。

(北原 保雄『問題な日本語』)

(51) ~ (53) の「～んばかり」は、今にも言いそうである状態で、まだ言っているわけではなく、そのおかれている状況を説明している。

「今にも～しそうである」という状態で、その状況を説明する。つまり、まだ実現はしていないが、いつそのような状況になっても不思議ではない状態にあることを表している。

2.4.2. 「ばかりではない」

(54) こう言ったばかりでなく、今まで敷いていた床を上げさせて、いつものような元気を示した。(夏目 漱石『ころ』)

(55) そうしてこの言葉は母に対する言ひ訳ばかりでなく、自分の心に対する言ひ訳でもあった。(夏目 漱石『ころ』)

(56) ジャック・ソニエールは女神の図像学の第一人者だった。
豊饒神や、女神崇拜や魔術信仰や、聖女にまつわる資料研究に情熱を注いでいたばかりではない。(ダン・ブラン『ダ・ベンチ・コード』)

(54) は、「こう」が指す言葉を「言った」ということ以外にも、「ばかり」の次にくる文の動作があるということを表わす。(55) は、母に対して「言ひ訳」をすること以外にも自分にも言ひ訳をしている。(56) は、研究に「情熱を注いでいた」こと以外にも何かをしていたということを表わす。

このように、「ばかりではない」は、「ばかり」の前にくる語や文それ以外にも他の出来事がいいという気持ちがあることを意味する。叙述の追加を前提とした限定である。

3. 限定の取り立て助詞「だけ」

3.1. 「だけ」の接続

「だけ」はさまざまな語に接続することができる。

3.1.1. 名詞・代名詞との接続

(57) 親に養ってもらって、家庭菜園でトマトを育てるようなそんな未来だけだった。
(市川 拓司『いま、会いにゆきます』)

(58) 彼だけに伝えていただきたいのですが。

(57) では、名詞「未来」に「だけ」が接続し、(58) では代名詞「彼」に「だけ」が接続している。「だけ」は名詞・代名詞に接続することができる。

3.1.2. 副詞との接続

(59) 少しだけ食べよう。

(60) あたしたちはパパについて話し、ちょっとだけしあわせな気持ちでぐっすり眠った。
(江国 香織『神様のボート』)

(61) わずかだけですが、お納めください。

(59) ~ (61) はいずれも、先行副詞がきわめて低い程度や、その範囲の少なさを表わす副詞である。

「ばかり」と同じく、副詞に接続する。しかしその先行副詞は、「すこし、ちょっと、わずか」などのように、きわめて低い程度や、その範囲の少なさを表わす副詞であるということが言える。

3.1.3. 動詞との接続

(62) たとえばいま、芝の枯れ始めたこの空堀の先にあのひとの姿がみえても、私はおどろいたりしない。やっぱり、と思うだけだ。(江国 香織『神様のボート』)

(63) あたしは両目をぎゅっとつぶった。
ぎゅっとつぶっても涙はこぼれてくれなくて、下まぶたと下まつげを濡らしただけだった。(江国 香織『神様のボート』)

(64) 生きているだけでいろんなことがあります。(よしもと ばなな『海のふた』)

(62) は、「思う」という動詞のル形に「だけ」が接続し、(63) は「濡らした」という動詞の「タ」形に「だけ」が接続し、(64) は「生きている」という動詞「テイル」形に「だけ」が接続している。したがって、「だけ」は「ばかり」と同じく、動詞の「ル」形、「タ」形、「テイル」形に接続する。

3.1.4. 形容詞との接続

(65) 両者の意味内容は論理的に等しいだけでなく、敬語のレベルにおいても、丁寧さの度合いで釣り合った表現になっています。 (北原 保雄『問題な日本語』)

(66) 子供の心にも、白々と雨戸の閉った空家は、叢が深ければ深いだけ、フツと四辺が森閑とした時変な気持を起させるのか、荒庭は直放棄されてしまった。
(宮本 百合子『蓮花図』)

(67) サイレンの音よりちょっと高いだけで、終るのも、終りに近づいて音程の下ってゆく調子も、そっくりそのままに連れて、 (宮本 百合子『犬三熊』)

(65) ~ (67) は「等しい」、「深い」、「高い」に、それぞれ「ばかり」が接続している。よって、「ばかり」は形容詞にも接続することができる。

3.2. 「だけ」と格助詞の位置関係

3.2.1. 名詞＋格助詞＋取り立て助詞

(68) * 職場で、私がだけ女性です。

(69) ? 君をだけ信じている。

(70) 彼にだけ伝えてください。

(71) 結婚式の招待状は彼女からだけ届きました。

(72) 会社と家とだけ往復します。

(73) このビルではエレベーターの横でだけ喫煙できます。

(74) 焼き肉を食べるときは、その店へだけ行きます。

(75) その場所までだけ車で行きます。

(76) * 肉よりだけ魚も食べる方がよい。

(68) ~ (76) のように、「だけ」は、格助詞 (ニ、カラ、ト、デ、ヘ、マデ) の後につくと言うことができるが、格助詞 (ガ、ヲ、ヨリ) にはつかない。

3.2.2. 名詞 + 取り立て助詞 + 格助詞

- (68a) 職場で、私だけが女性です。
(69a) 君だけを信じている。
(70a) 彼だけに伝えてください。
(71a) 結婚式の招待状は彼女だけから届きました。
(72a) 会社と家だけと往復します。
(73a) このビルではエレベーターの横だけで喫煙できます。
(74a) 焼き肉を食べるときは、その店だけへ行きます。
(75a) その場所だけまで車で行きます。
(76a) 肉だけより魚も食べる方がよい。

(68a) ~ (76a) のように、名詞 + 格助詞の後の場合とは異なり、「だけ」は、ほぼすべて格助詞の前に現れるようである。

3.2.3. 「取り立て助詞」の位置と意味

- (19) 図書館でばかり勉強しています。
(19a) 図書館ばかりで勉強しています。

(19) (19a) では、格助詞「で」が、「ばかり」の前にくる場合と後にくる場合を見たが、どちらの場合も文の意味が変わることなく使用できた。

しかし、格助詞「で」が「だけ」の前にくる場合と後ろにくる場合ではどうだろうか。

(77) このビルではエレベーターの横でだけ喫煙できます。

(77a) このビルではエレベーターの横だけで喫煙できます。

(77) の「でだけ」は、他の方法や手段によれば絶対にいけないという意味があり、エレベーターの横のみで喫煙するという意味を表し、(77a) の「だけで」は、他の方法や手段を利用しなくても、最低エレベーターの横のみで喫煙できるという意味を表す。すなわち、

(77) は、「で」を「だけ」が限定し、行為などの実行に必要な最後の方法・手段を表し、(77a) は、先行語を限定した「だけ」に「で」(～よりの意味) がついていて、最低限必要とする事物の限定なのである。

したがって、格助詞「で」が「ばかり」の前にくる場合と後ろにくる場合は、どちらの場合も文の意味が変わることがなく、「だけ」の場合は、格助詞が「だけ」の前にくる場合と後にくる場合とでは、大きく意味が異なるということができるのである。そして、これは「で」格に限るのである。

3.3. 取り立て助詞「だけ」の意味

「だけ」は、近世に成立し、語源的には「丈(たけ)」に由来する。「背たけ」などの「～たけ」であり、伸び広がっていくものの限度であるが、その名詞的な用法が、助詞に転じたものである¹¹⁾。

「だけ」には、限定の意味があるが、その中である限定されたものの範囲という意味で、程度の意味も持つ。また、その程度を比例したり、強調したりする場合もあり、前後の文脈で「だけ」の持つ意味が異なってくることがある。そうしたことにより、「ばかり」と用法が似てくることになる。「だけ」と「ばかり」の比較は後で考察することにする。

11) 森田良行(1980), 『基礎日本語2』, 角川書店, pp252~253

「だけ」は「ばかり」と同じく限定の意を表わす取り立て助詞である。

(78) すぎたことは絶対変わらないもの。

いつもそこにあるのよ。

すぎたことだけが、確実に私たちのものなんだと思うわ。(江国 香織『神様のポート』)

(78a) すぎたことが、確実に私たちのものなんだと思う。

(78b) すぎたこと以外(つまり、すぎていないこと)は、確実に私たちのものなんだと思わない。

(78) は、「だけ」が取り立てる自者は、「すぎたこと」である。そして次の(78a)を前提とし、(78b)を含意としている。

前提である(78a)では、自者である「すぎたこと」が「確実に私たちのものなんだと思う」ということを肯定しているが、その反面、含意である(78b)では、他者である「すぎたこと」以外(つまり、すぎていないこと)が「確実に私たちのものではないと思う」と否定されているのである。

つまり、「だけ」は前提で自者が肯定され、含意で他者が否定されるのである。そして、ここでも、「だけ」が限定の意を表わすということが出来る。これは「ばかり」の場合と同じと言うことができる。

(79) 私はコーヒーだけ飲んだ。

(79) では、(79a) 私がコーヒーを飲んだ。という事実と、(79b) (考えられたり、期待されていた) コーヒー以外の物は飲まなかった。という意味を含んでいる。

(79) を見たとき、それを見た人は(79b)の意味を受けるのである。

つまり、「コーヒーを飲んだ」と「コーヒー以外は飲まなかった」という二つの意味を比べながら、話し手がそれを強調しているような意味を持つ形である。

これは、「AだけB」という形で、Aに対してBであるということと、AがBと関係することが考えられたり、期待されたりすることのうち、A以外のものについてBが実現しないということとの二

つを合わせ持つて言う形である。

また、Aが数量を表わす名詞である場合は、

(80) 私は1時間だけ待った。

(80) は、(80a) 「私が1時間待った」という事実と、(80b) 「1時間以上は待つだろうと考えていた」という隠された意味を表わして、その事実に対して考えていたよりも短かったという話し手の気持を意味しているのである。

3.3.1. 限定の「だけ」

(81) たとえばいま、芝の枯れ始めたこの空堀の先にあのひとの姿がみえても、私はおどろいたりしない。やっぱり、と思うだけだ。(江国 香織『神様のボート』)

(82) ルーブルの、何エーカーもの展示室群を見張るとなると、送られてくる映像を確認するだけでも数百人の技術者が必要だ。(ダン・ブラン『ダ・ビンチ・コード』)

(83) 私は腹の中で、ただ自分が悪かったとくり返すだけでした。(夏目 漱石『こころ』)

(84) Kはお嬢さんと私とのあいだに結ばれた新しい関係について、最初はそうですかとただ一口言っただけだけだったそうです。(夏目 漱石『こころ』)

(85) ただ奥さんがにらめるような目をお嬢さんに向けるのに気がついただけだけでした。(夏目 漱石『こころ』)

(86) 「首相が使う言葉としていかなものか」と指摘しただけ。

毎日新聞 (06.03.07)

(87) しかしそうではなく、普通の男の人が立っているだけなのである。

(金田一 春彦 『ホンモノの日本語を話していますか?』)

(88) タクシーが待っているだけです。

(ダン・ブラン 『ダ・ビンチ・コード』)

(89) 彼は仕事もしないでしゃべっているだけだ。

(81) は動詞の「ル」形「思う」について、「思う」ということについて限定している。

(82) は動詞の「ル」形「確認する」について、「確認する」という動作について限定している。(83) は動詞の「ル」形「くり返す」について、「くり返す」ということの動作について限定している。

(84) は「一口言った」ということの動作を限定し、(85) は「気がついた」ということの動作の限定し、(86) は「指摘した」ということの動作を限定している。

(87) は「立っている」ということの動作の限定を表わし、(88) は「待っている」ということの限定を表わし、(89) は「しゃべっている」という動作の限定を表わしている。

(81) ~ (89) では、いずれも「だけ」の本来の意味である「限定」としての意味を見た。

3.3.2. 程度の「だけ」

(90) そして、母には昔から、先のことを見通す不思議な力が少しだけあった。

(91) はじめちゃんはその日、ちょっとだけ水に入ってくると言い出して、海に入って、案の定くらげにさされて熱を出した。
(よしもと ばなな 『海のふた』)

(92) わずかだけ、置いておく。

(90) のように、「たくさん」であることと、「少し」であることを比べて、そのどちらかひ

とつをさしおいて、「たくさんではなく、すこしだけ」とその程度を表す言い方である。

(90) ~ (92) のように、その程度を限定するため、「だけ」がつく副詞は、少ない、多いで言えば少ない方を表わす副詞、「少し、ちょっと、わずか」などにしかつかないと言することができる。

3.4. 「だけ」の慣用句的な用法

3.4.1. 「～だけに」「～だけあって」

(93) 汚職にまみれた市政の再建がキーワードだけに、“市民派”をアピールする候補が増える雲行きだ。 毎日新聞(06.03.07)

(94) 彼女は秀才だけあって、ハーバード大学に見事入学した。

(93) は名詞「キーワード」の前にある事柄が、キーワードであるという事情を表わし、(94) は「彼女」が「秀才である」という能力を表わしているのである。形式として、「～だけに/～だけあって」の形で、「身分・事情・能力に応じて」という意味を持つ。

4. 取り立て助詞「ばかり」と「だけ」の比較

序論でも述べたように、「ばかり」と「だけ」は限定という意味では同じで、入れ替え可能な場合が多くある。それはいったいどのような場合であるのだろうか。また、「だけ」がつく語にはさまざまな文があるが、どのようなものがあるのだろうか。

「ばかり」と「だけ」は、1. と2. でも見てきたように、「限定」を表わす取り立て助詞として意味もよく似ている面が多くある。そして、文体から見るとどちらも現代語として使われており、用法から見ても大きな違いはあまり見られない。しかし、この二語は全く同じであるかと言えば、そうとは言い切れない。

同じ文脈で「ばかり」を用いるか「だけ」を用いるかでその意味が異なる場合がある。また、「ばかり」は使用できるが、「だけ」は使用できない場合もある。

これらをふまえて、ここでは「ばかり」と「だけ」の比較を考察する。

4.1. 「ばかり」と「だけ」両方使用できる場合

次の例文では「ばかり」と「だけ」を入れ替えても全く意味が異なる場合である。この場合の意味は「あるものを他のものと区別する」という意味での「限定」である。

(95) ティラミスとかパンナコッタとか、最近流行の洋菓子ばかりに若い人の目がいくようだが、ときには和菓子を手に取って、日本の自然の風物の美しさ、季節感の見事さも感じ取ってほしい。
(金田一 春彦『ホンモノの日本語を話していますか?』)

(96) 犬にしても猫にしても昔からあんなに人に愛されたのに、動物愛護協会からクレームが来そうな言葉ばかり並んでいるのは不思議である。
(金田一 春彦『ホンモノの日本語を話していますか?』)

(95) では、「最近流行の洋菓子」に限定してそのみが「若い人の目をひく」と言っており、(96) では、「クレームが来そうな言葉」に限定してそのみが「並んでい
る」と言っている。どちらの場合も名詞につづき、「ばかり」を使った例文であるが、この
「ばかり」の部分を「だけ」に入れ替えてみると、

(95a) ティラミスとかパンナコッタとか、最近流行の洋菓子だけに若い人の目
がいくようだが、ときには和菓子を手に取って、日本の自然の風物の美しさ、季節
感の見事さも感じ取ってほしい。

(96a) 犬にしても猫にしても昔からあんなに人に愛されたのに、動物愛護協会
からクレームが来そうな言葉だけ並んでいるのは不思議である。

(95a) (96a) のように、文も自然であるし、意味も変わることがない。よって、(9
5) (96) と同じように「限定」を表すようである。

他の例文も見てみることにする。なお、次の例文は「だけ」の文で「ばかり」と入れ替えら
れる文である。

(97) なぜこした中で「案山子」だけが異色の内容になったのだろうか。

(金田一 春彦『ホンモノの日本語を話していますか?』)

(98) 春の夕方静かになった寺の境内には、僧が戸締まりする音だけが響く。

(金田一 春彦『ホンモノの日本語を話していますか?』)

(97) (98) は、「ガ」の主語で動詞全体の述語をとる、「～だけが～する」と
いうものであるが、この場合「だけ」と「ばかり」を入れ替えてみると、次のようになる。

(97a) なぜこした中で「案山子」ばかりが異色の内容になったのだろうか。

(98a) 春の夕方静かになった寺の境内には、僧が戸締まりする音ばかりが響
く。

(97a) (98a) の場合も、(97) (98) と同じように「ガ」の主語で動詞全体の述語をとる。そして「だけ」の部分を「ばかり」に入れ替えても文脈も自然であるし、意味も変わらないといえることができる。

(99) 打ち上げ場周辺を移動中、機動隊員から職業や携帯電話の番号を聞かれたのは、
この時だけ。 毎日新聞 (06.03.07)

(99) のように、「の」で受けるような、「～するのは～だけだ」の文の場合で、「だけ」の部分を「ばかり」に置き換えてみると、次のようになる。

(99a) 打ち上げ場周辺を移動中、機動隊員から職業や携帯電話の番号を聞かれたのは、この時ばかり。

(99a) は (99) と同じように、準体助詞「の」で受ける場合である。そして「だけ」の部分を「ばかり」に置き換えてみても文脈は自然であるし、意味も変わらないといえることができる。

(100) ただし、厚労省は障害程度区分を決定する際の判定項目については、この介護保険の要介護認定基準だけでなく、「障害者の特性」を反映する項目も導入する。
毎日新聞 (06.03.07)

(101) 「今回も小選挙区に立って、護憲でなく、強権的な小泉首相の政治手法を批判してほしいという気持ちもある」と話した。 毎日新聞 (05.08.16)

(100) (101) を見ると、「だけ」に「～ではない」や「～でなく」という打ち消しを表わす語がついて否定の表現になっている。この例文の「だけ」の部分を「ばかり」に置き換えてみると、次のようになる。

(100a) ただし、厚労省は障害程度区分を決定する際の判定項目については、この介護保険の要介護認定基準ばかりでなく、「障害者の特性」を反映する項目

も導入する。

(101a) 「今回も小選挙区に立って、護憲ばかりでなく、強権的な小泉首相の政治手法を批判してほしいという気持ちもある」と話した。

(100a) (101a) は (100) (101) と同じように、「ばかり」に「～ではない」や「～でなく」という否定がついた形であるが、「だけ」の部分「ばかり」に置き換えても文脈は自然で、意味が変わることがない。

また、「だけ」が「の」とついで、連体修飾語となる場合もある。

(102) その学校は小さな運動場とプールだけの施設であった。

(102) のように「の」をとらない、修飾語である「運動場とプール」が、修飾語ではない「施設」の所有される語で、運動場とプールのみある施設のように断定している形の場合である。この例文の「だけ」の部分「ばかり」に変えてみると、次のようになる。

(102a) その学校は小さな運動場とプールばかりの施設であった。

(102a) でも文脈が自然で意味も変わらないということができる。

4.2. 「ばかり」と「だけ」を入れ替えるとニュアンスが異なる場合

「ばかり」と「だけ」の部分を入れ替えると、入れ替えても文自体はおかしくはないが、ニュアンスが変わってしまうような場合がある。

(103) 彼のあわてふためいている様ばかりは、私にはとうてい理解できないものであった。

(103a) 彼のあわてふためいている様だけは、私にはとうてい理解できないものであった。

(104) そうしてその言葉は母に対する言い訳ばかりでなく、自分の心に対する言い訳でも
あった。 (夏目 漱石『こころ』)

(104a) そうしてその言葉は母に対する言い訳だけでなく、自分の心に対する言い訳でも
あった。

(105) それでも、鮎や鯰は構わずに食べるが、どうも鯉だけは……。いや、実は泥臭
いというばかりでなく、ちょっとわけがあるので……。 (岡本綺堂『鯉』)

(105a) それでも、鮎や鯰は構わずに食べるが、どうも鯉ばかりは……。いや、実は泥
臭いというばかりでなく、ちょっとわけがあるので……。

(103a) で「だけ」は使用できるが、(103) の場合とは言葉のニュアンスがちがってしまうように思われる。どちらの文も「あわてふためいている様」に限定してそれをさらに「強調」しているという点では共通する。しかし、(103) と(103a) を比べてみると、(103a) のほうが、その「あわてふためいている様」に対して話し手が厳しい感情を抱いているようなニュアンスを感じ取るようである。

(104) は、「ばかり」が慣用的な表現として使われており、意味的には「限定」であるが、その限定をさらに「強調」している。「だけ」は使用できるが、(104a) の場合、「言い訳」のみに限定されているのが強い感じがする。

(105a) は、(105) の「だけ」の部分「ばかり」に置き換えたものであるが、(105) とはニュアンスが異なるようである。どちらの文の「鯉」に対して限定しているのがあるが、(105) のほうが、強い限定を感じる。

したがって、「ばかり」と「だけ」を置き換えると、文章自体はおかしくはないが、言葉のニュアンスが異なる場合があるということがわかった。

4.3. 「ばかり」のみ使用できる場合

「ばかり」の限定という意味の中に「限定されたことを何回もしきりにする」という意味がある。(106)～(109)のように、「ばかり」を「だけ」に入れ替えると、非文になる場合がある。

(106) 私の上司は毎日インターネットばかりして、全然仕事をしない。

(106a) *私の上司は毎日インターネットだけして、全然仕事をしない。

(107) そのころの新聞はじっさい田舎者には日ごとに待ち受けられるような記事
ばかりであった。 (夏目 漱石『ころ』)

(107a) *そのころの新聞はじっさい田舎者には日ごとに待ち受けられるような記事だけであつた。

(108) ただ、僕はいままで、ばかな失敗ばかりやって来たから、僕のばかな真似をするなどなんべんでも繰り返して言いたいだけだ。 (太宰 治『困惑の弁』)

(108a) *ただ、僕はいままで、ばかな失敗だけやって来たから、僕のばかな真似をするなどなんべんでも繰り返して言いたいだけだ。

(109) たとえていうなら、その人たちは後ろばかりを見ている人たちで、現実を正視することに怠惰であると共に、未来・・・何処へ行っても、女性であるという理由だけで・・・ (与謝野 晶子『「女らしさ」とは何か』)

(109a) *たとえていうなら、その人たちは後ろだけを見ている人たちで、現実を正視することに怠惰であると共に、未来・・・何処へ行っても、女性であるという理由だけで・・・

(106)の「ばかり」は、「インターネットをすることが多い」という意味を含むので、文脈は不自然にはならない。これに対して、(106a)は、通常会社でインターネットをして1日、過ごすということは考えられないため、ここでは「だけ」を使うことはできない。

同じく、(107)は、「～ような記事」が多くあるという意味を持たせる「ばかり」を使うのが自然である。対して、(107a)の場合も同じことが言えるが、「～ような記事」のみがあるということは考えられないからである。

(108)のように、「ばかな失敗」を多くしてきたという意味を持たせる「ばかり」を使うのが適切である。これに対して、(108a)は、今までばかな失敗のみしてきたということは考えられないため、ここでは適切ではないのである。

(109)は、後ろのみを多く見ている人という意味を含む「ばかり」を使うことが自然である。対して、(109a)は、後ろのみを見ている人ということが考えられないため、ここでは適切ではないのである。

このように、「ばかり」の意味の中で、限定されたことを何回もしきりにするという意味を含むときは、「だけ」に置き換えられないといえることができる。

4.4. 「だけ」のみ使用できる場合

(110) お孝さんも熱情家だからね。品川の伯父さんの娘だけあって、あらそわれないところがある。 (宮本百合子『白藤』)

(110a) * お孝さんも熱情家だからね。品川の伯父さんの娘ばかりあって、あらそわれないところがある。

(111) あなたなら、私の言う事を必ず全部、信じてくれるだろうとは思っていたのですが、やっぱり、血をわけた兄弟だけあって、わかりが早いですね。 (太宰治『女神』)

(111a) * あなたなら、私の言う事を必ず全部、信じてくれるだろうとは思っていたのですが、やっぱり、血をわけた兄弟ばかりあって、わかりが早いですね。

(93) 汚職にまみれた市政の再建がキーワードだけに、“市民派”をアピールする候補が増える雲行だ。 毎日新聞(06.03.07)

(9 3 a) * 汚職にまみれた市政の再建がキーワードばかりに、“市民派”をアピールする候補が増える雲行だ。

(1 1 2) 使っていい金が世間にあっただろうし、そういう金が流れているだけに、物は悪くて高くなっているのだから、
(宮本百合子『生活のなかにある美について』)

(1 1 2 a) * 使っていい金が世間にあっただろうし、そういう金流れているばかりに、物は悪くて高くなっているのだから、

(1 1 3) さすが先生だけあって、よくご存知ですね。

(1 1 3 a) * さすが先生ばかりあって、よくご存知ですね。

(1 1 4) 師範役の小林は、さすがに剣道の達人だけあって、斬り方がいちばん上手でありました。
(中里介山『大菩薩峠』)

(1 1 4 a) * 師範役の小林は、さすがに剣道の達人ばかりあって、斬り方がいちばん上手でありました。

(1 1 0) (1 1 1) は、「身分に応じて」、そして、(9 3) (1 1 2) は、「事情に応じて」、(1 1 3) (1 1 4) は、「能力に応じて」の意味を持っている。

(9 3) (1 1 2) では、文の意味としては「だけ」の前にくる文で事実を話し、後の文で事実から起こる結果を話している。

また、(1 1 0) (1 1 1) (1 1 3) (1 1 4) では、「～だけあって」の後にくる文で事実が話され、前の文でそれが起こるべき理由が述べられている。

(9 3) (1 1 3) の「だけ」の部分を「ばかり」に入れ替えてみると、その事実から起こる結果にならず、文は非文になる。

よって、「～だけに/～だけあって」のような慣用句的な形で、「身分や事情や能力に応じて」という意味がある場合、「だけ」は「ばかり」への置き換えができないと言える。

(115) そして、夕方になるとやっと一時間だけ、かってにあそぶ時間をもらいました。

(鈴木三重吉『岡の家』)

(115a) * そして、夕方になるとやっと一時間ばかり、かってにあそぶ時間をもらいました。

(116) そこで五時間で私達が暮せるならば、五時間だけの月給をもらって五時間で働くのをやめて、そしてあとはいろいろな文化的な、

(宮本百合子『幸福の建設』)

(116a) * そこで五時間で私達が暮せるならば、五時間ばかりの月給をもらって五時間で働くのをやめて、そしてあとはいろいろな文化的な、

(117) もう三十秒、もう十秒だけ待とう。(坂口安吾『白痴』)

(117a) * もう三十秒、もう十秒ばかり待とう。

(115) ~ (117) は、「だけ」が、「数量にあてはまる程度」という意味を持つ場合であるが、どの場合も、「だけ」を「ばかり」に置き換えると、文本来の意味を失ってしまうのである。

(110) ~ (117) のように、「だけ」の意味が、「数量にあてはまる程度」や「身分や事情や能力に応じて」という意味を持つときは、「ばかり」に置き換えができない場合があるということがわかった。

5. 結論

日本語の取り立て助詞である「ばかり」と「だけ」は「限定」という意味を表すという点では非常によく似ており、区別がつきにくい。しかしこのふたつが全く同じ意味を持つかという点とは言い切れない。したがって、本論文では、「ばかり」と「だけ」それぞれの性質・意味・用法などを考察した上でこの二語を比較考察したのである。

したがって、結論をまとめてみると、次のようなことが言える。

1) 格助詞との位置関係においては、「ばかり」は、「名詞＋格助詞＋取り立て助詞」の場合、格助詞「が」「より」「まで」以外につき、「名詞＋取り立て助詞＋格助詞」の場合は、すべての場合に使うことができる。

一方、「だけ」は、「名詞＋格助詞＋取り立て助詞」の場合、格助詞「が」「を」「より」以外につき、「名詞＋取り立て助詞＋格助詞」の場合は、すべての場合に使うことができる。

2) 限定の意味においては、「ばかり」と「だけ」は「限定」という意味では同じである。「ばかり」は限定という意味の中でも、さらに、「事柄・事物の限定」、「時間の限定」、「区別の限定」と細かく分けられるのに対し、「だけ」は単なる限定の意味のみ持っている。

3) 程度の意味においては、「ばかり」「だけ」どちらにもこの意味があり、同じように使うことができる。そして、「ばかり」は、マイナス的な評価の意味を表す。

4) 「ばかり」と「だけ」を入れ替えることができる場合は、「限定」の中でも「あるものを他と区別する」というような場合、「ばかりでなく」「ばかりではない」というような否定の意味を伴う場合である。

5) 「ばかり」と「だけ」は入れ替えが可能だが、入れ替えるとニュアンスが変わる場合がある。

6) 「ばかり」のみ使用できる場合は、「限定されたことを何回もしきりにする」という意味を含む場合である。

7) 「だけ」のみ使用できる場合は、「だけ」の慣用句的な「だけに」「だけあって」という表現で、「身分や事情や能力に応じての」や、「数量にあてはまる程度」というような意味を含む場合であると言える。



〈例文出題〉

市川拓司「いま、会いにゆきます」

よしもとばなな「海のふた」

金田一春彦「ホンモノの日本語を話していますか？」

夏目漱石「こころ」

北原保雄「問題な日本語」

江国香織「神様のポート」

ダン・ブラン「ダ・ベンチ・コード」

毎日新聞

青空文庫

〈参考文献〉

〈書籍〉

金水敏・工藤真由美・沼田善子（2000）,『日本語の文法 2・時・否定と取り立て』,岩波書店

此島正年（1983）,『助動詞・助詞概説』,桜楓社

鈴木一彦（1997）,『日本文法の本質一語・句論一』,東宛社

寺村秀夫（1991）,『日本語のシンタクスと意味第3巻』,くろしお出版

中西久美子（1995）,「シカとダケとバカリ」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法（上）単文編』,くろしお出版

仁田義雄（1997）,『日本語文法研究序説—日本語の記述文法を目指して—』,くろしお出版

沼田善子（1989）,「とりたて詞とムード」仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』,くろしお出版

お出版

- 沼田善子（2003）、「現代語のとりたての体系」沼田善子・野田尚史編、『日本語のとりたて—現代語と歴史的变化・地理的変異』,くろしお出版
- 橋本進吉（1969）,『助詞・助動詞の研究』,岩波書店
- 藤原与一（1994）,『日本語学シリーズ② 文法学』,武蔵野書院
- 松村明（1969）,『古典語・現代語 助詞助動詞詳説』,学灯社
- 益岡隆志・田窪行則（1992）,『基礎日本語文法—改訂版—』,くろしお出版
- 益岡隆志・野田尚史・沼田善子編（1995）,『日本語の主題と取り立て』,くろしお出版
- 森田良行（1980）,『基礎日本語2』,角川書店
- 森田良行（1994）,『動詞の意味論的文法研究』,明治書院
- 山田孝雄（1979）,「助詞の種類別け」服部四郎・大野晋・飯倉篤義・松村明『日本の言語学第4巻』,大修館書店

<論文>

- 国立国語研究所（1951）,国立国語研究所報告3「現代語の助詞・助動詞—用法と実例—」,秀英出版
- 張建華（1995）,「「だけ」「しか～ない」と“只”について」,言語・地域文化研究,1
- 陳連冬（1991）,「「だけ」と「ばかり」について—個限定と類限定の観点—」,青山語文22
- 沼田善子（1992）,「とりたて詞と視点」,日本語学11—8,明治書院
- 沼田善子（1984）,「とりたて詞の意味と文法—モ、ダケ、サエを例として—」,日本語学,明治書院

<Abstract>

Research on the Toritate Particles

「ばかり」 and 「だけ」

Yasuyo Morimoto

Department of Japanese Language and Literature,
Graduate School, Cheju National University

Supervised by Professor Seung-han Kim

Grammar is very important in learning Japanese language. Of the grammar elements, using the postpositions right is difficult and therefore is hard to master. Even Japanese learners who stayed in Japan for a long time are sometimes unable to use them properly. In particular, among the postpositions or particles, 「ばかり」 and 「だけ」, share such similar meanings that they are easily confused.

The aim of the study is to distinguish the two by comparing their functions and usages so as to provide their proper usage and characteristic difference. To this end, sentences containing either of them have been collected from newspapers, novels and the internet and then classified according to usage and meaning.

「ばかり」 and 「だけ」 are classified into adverbial particles, mainly indicating a limit. They are similar but not identical in their meanings. The findings of the study from comparing these particles are as follows:

1) In view of the relations between case particles and the two particles, in the case of 「noun + case particle + toritate particle」, 「ばかり」 follows

case participles except 「が」, 「より」 and 「まで」 while 「だけ」 follows those except 「が」, 「を」 and 「より」. On the other hand, in the case of 「noun + toritate particle + case particle」, either of them precede all case particles.

2) Each of 「ばかり」 and 「だけ」 has a variety of meanings, but, they share similar meanings when indicating a limit. Furthermore, 「ばかり」 indicates 「limit of matters and things」, 「limit of time」, 「limit of distinction」, making those specific classifications possible, while 「だけ」 has a simple meaning of limit.

3) 「ばかり」 and 「だけ」 also indicate the meaning of the extent, in which case, they provide similar meaning.

4) The cases in which the two can be switched as indicating a limit are when they have the effect of making a distinction between things and negative expressions in such combinations as 「ばかりでなく」 or 「ばかりではない」.

5) 「ばかり」 and 「だけ」 can be switched but in some cases the switching makes a difference in meaning.

6) It is only 「ばかり」 which can be used when the limited thing by 「ばかり」 is done frequently.

7) It is only 「だけ」 which is used when it is a part of such idiomatic expressions as 「だけに」, 「だけあって」, which follow words corresponding to one's status, circumstances, ability, indicating a number or measure of them.